

第1期第4回 新潟市美術館及び新潟市新津美術館協議会 議事録要旨

日 時：平成26年2月26日（水）午前11時から

会 場：新潟市美術館

出席者：

（委員）会長	宮田 亮平	東京藝術大学学長
副会長	中山 輝也	新潟県博物館協議会副会長
	大倉 宏	美術評論家
	大島 煦美子	財団法人 新潟県女性財団理事長
	菅井 甚右エ門・哲	書人
	野川 彰夫	新潟市立江南小学校校長
	福永 治	広島市現代美術館館長
	降旗 千賀子	目黒区美術館学芸係長
	武田 勝治	公募委員
	中村 文香	公募委員

（事務局）

新潟市美術館	塩田 純一	新潟市美術館長
	井関 一博	同 副館長
	大谷 道佳	同 総務係長
	矢部 淳也	同 主査
	松沢 寿重	同 学芸係長
	荒井 直美	同 主査（学芸員）
	藤井 素彦	同 副主査（学芸員）
	上池 仁子	同 副主査（学芸員）
	山岸 亜由美	同 （学芸員）
新潟市新津美術館	横山 秀樹	新潟市新津美術館長
	高橋 努	同 副館長
	大森 慎子	同 主査（学芸員）
	小林 一吉	同 主査（学芸員）
	小熊 千佳子	同 主査

次第：

- 1 開会挨拶
新潟市新津美術館 館長 横山 秀樹
新潟市美術館及び新潟市新津美術館協議会 会長 宮田 亮平
- 2 出席者紹介
（1）委員紹介
（2）事務局紹介
- 3 報告
部会での検討状況 教育普及事業について
- 4 議事
平成26年度 新潟市美術館及び新潟市新津美術館事業計画について
- 5 閉会挨拶
新潟市美術館長 塩田 純一

1 開会挨拶

（横山館長あいさつ）

当協議会で、これまで2年間にわたり新潟市美術館と新津美術館の事業について審議を重ねていただき、本日が第1期の最後となる。これまで両美術館の運営や事業についての貴重なご意見、適切なお助言をいただいた。今後とも、両館において市民の視点に立って特色のある美術館活動を行っていききたい。本日も、委員の皆様方の貴重なご意見をお聞かせいただきたい。

（宮田会長あいさつ）

先般、新津美術館の良い空間で話が進んだ。今日も委員の皆様方からいいお話を、両館のためにご尽力いただきたい。

2 出席者紹介

事務局より、委員と事務局の出席者を紹介。

3 報告

部会での検討状況 …… 教育普及事業について

（井関副館長）

資料1（新潟市美術館及び新潟市新津美術館協議会部会議事要旨）に沿って、11月14日開催の部会（金山座長、大倉委員、福永委員、降旗委員の出席）について報告。

（宮田会長）

オープンギャラリーで、尻込みしている教員への支援が必要というのはどういうことか。

（松沢係長）

オープンギャラリーの趣旨が、美術館を使って先生に授業をしていただく当初の目的もあったため、少しハードルが高くなっていた部分がある。

（大倉委員）

実際にオープンギャラリーに参加した先生と話す機会があり、絵を見たときに思いついた言葉を書く授業をしたいと思い美術館に相談したところ、展示室で書くのはまずいので別の場所で書くようにと言われたそうだ。見た瞬間に思ったことを書かせたかったので、少し残念だったというお話だった。事前によく話し合うと違った形ができたのかと思う。その先生のように、このオープンギャラリーに反応して、すごく良いと言う先生もいるので、事前によく話し合っ、生徒が美術館に行って楽しかったという体験になるきっかけにしていくといい。

（山岸学芸員）

その先生は、3年前から連続して、絵を見て詩を作るという授業をされていた。3年前は、その場で油性マジックペンを出して大洋紙に書きたいということで、空いていた部屋に急遽移動してもらい、詩を作った。

次の年に応募された際には、事前に相談して、大洋紙に鉛筆で、展示室の中で実際の作品を前にして書くよう改善した。今年も同じように大洋紙に鉛筆で、作品を前にして書き、その後、個別でワークシートを配り、そのワークシートに詩を書くという授業だった。

（井関副館長）

事前に学校の先生方とのコミュニケーションをとりながら、学校のニーズ、それから美術館としてできる事とできない事はあるが、なるべく不可能がないよう調整していきたい。

（大倉委員）

今のお話で、改善されていたことは分かった。そのときの対応によっては管理的になりがちなので、積極的な申し出があったときに、もう少し柔軟い対応をしていたら印象も違ったのではないかと思い、その辺が協働の大事なところかと思う。

（塩田館長）

私が感じていることは、何のために教育普及事業をやるのかという、その根本のところの

問いかけがなくて、いろいろ始めているような気がして、一度見直すことも必要かと思う。目黒区美術館の先進事例も話していただいたが、今後、本当にいい美術館になっていくためにはどういったことが必要なのか、根本に立ち返って考えることが必要だと思う。

いかに市民から美術館に来ていただくか、親しんでもらうかというあたりで、対応も変わってくると思うので、心してやっていきたい。

(宮田会長)

鉛筆で書かれた、絵を見て心象表現を文字にしてくれたもの、それはどうしたのですか。

(山岸学芸員)

個人のワークシートに書いた詩を先生がいくつか選んで、見せてくださった。それをぜひ展示室に置いて、ほかのお客様にも見ていただき、詩の鑑賞はもちろん、オープンギャラリーそのものを紹介したいということで、学校に許可をいただき、進めている。

(宮田会長)

ぜひ、やってほしい。すぐその場で貼る場所を作っておくのも良い。すると、子どもたちはこんなふうに見るのかと、より幅が広がる。普段はできないにしても、オープンギャラリーなので前向きにやっていってほしい。

(降旗委員)

この前の議論で、教育普及ということで、先生方や市民との活動をいろいろやっていると聞いた。財政的な面や人力的な面でいろいろ負担が少しずつ出てきていると。それは私どもの美術館なども同じだが、ここで振り返って、今までの記録を作っておいて、そこからまた新しく3年先、5年先という目的を持ってやっていくといいと思う。

美術館というのは、実物の作品がある点で外の教育施設とは違う。本物がある。それを使えるということ。それから、いろいろな年齢層が集える場所であるし、時間的にも学校のよりに限られた時間ではなく活動ができるということで、家庭や学校ではできないことを美術館では教育としてできる。それも美術館と美術の普及ということだけではなく、人間性の回復といったことが、美術ができる力なのではないかと思う。

(宮田会長)

美術館がそうってくれると良い。学芸員の人たちもやる気が出る。

(福永委員)

私も部会に参加して、限りある予算や人員の中での教育普及事業、健闘されており、拡大していくことも必要だが、やはり大胆に見直すことが必要ではないかと申し上げた。人員と時間の制約の中で効率よくやっていくためには、どういう目的でどういうことが一番有効な

のかということをやっていく。それは両美術館が同じ市になり、役割分担ということもあると思うし、市内のほかの美術館や大学などの中で、美術館がやるべきこと、特化するようなことを少し検討すると思う。

それから、教育普及活動というのは限られた人数に対しての普及活動になるが、そのように貼り出すことでオープンギャラリーがもっと多くの方に伝播する、そのようなことを積極的にやって、参加人数が10人でも、それが100人や1,000人になったりするので、非常に有効だと思う。

(大島委員)

オープンギャラリーの件に関して、校長先生方の会などに出向いて、ぜひ、校長先生方もご協力を、担当教諭の方々に推奨していただきたい、と宣伝することも大事なのではないかと。そうすると、先生方もその授業がやりやすくなると思う。

(井関副館長)

校長会等の機会をとらえてPRに出向くことはある。ただ、そこから現場までの伝達にも、学校によって差があるようで、先生によって力を入れている科目が違うということなども背景にあるように思う。

(菅井委員)

学校現場に38年間いて、その後、14年目になるが、本当は根本から変えていかなければならないと思う。学校では、どれをやったら社会に貢献できるか、得か損か、学校の方針や、行政の予算の優先順位などもあり、そこに文化や芸術が食い込んでいくのは容易ではない。

私もこの2年間、出前美術館の授業で学校に出向いた際に、美術館に行ってください、現物を見てくださいと声を上げてきた。予算や人員の面でも、美術館の事業として続けていくのは大変なことだ。オープンギャラリーも同様。しかし、やっていかないとますます遠のく。今の活動を、歯を食いしばっても続けていく以外にないと思う。

(大島委員)

文化政策課長にお聞きしたい。政令指定都市である新潟市の教育の特徴として、教育委員会と美術館とのタイアップという形で子どもたちの将来に向けて、政策的なプランの中にきっちりと入れ込むことができれば、美術館の事業もスムーズに効果が上がると考えるが、行政によるバックボーン的环境作りについてはいかがか。

(鈴木課長)

市長部局と教育委員会との連携ということについて、市長部局である文化政策では「文化創造都市ビジョン」策定の過程で教育委員会と意見交換をしながら進めてきている。また実

際に事業を行う際に、教育委員会と意思の疎通を図るのは大事かと思う。ただ、全体的なバックボーンとしての作り込みが、現在、教育委員会とは、先ほどのビジョンを作る際には意見交換等はしているが、全体的にはまだ疑問もあろうかと思うので、教育委員会との情報共有を大事にしながら進めていきたい。

(宮田会長)

最近ではグローバルということで英語教育などが前に出てきているが、実は、芸術文化というのは世界語なので、それが結果的には言語を覚えるきっかけになったということは私もずいぶん体験した。

また、例えば、アサガオの種を使っていろいろな授業をやったりする。アサガオの種を植えて、育ち、アサガオの美しいすだれができる過程で、芸術家に加えて、化学の先生や物理の先生や生物の先生など、いろいろな先生方と、子どもたちと親とで輪が広がっていく。

最初に出た、尻込みしない教員を作っていくということもこれからは大事だと思うので、ぜひ前向きに続けてほしい。

4 議事

平成26年度 新潟市美術館及び新潟市新津美術館事業計画について

(井関副館長、高橋副館長)

平成26年度の両美術館の事業計画について、資料4から7で説明
新潟市美術館の改修事業について、パワーポイントで説明

(松沢係長、大森主査)

両美術館の企画展の内容について、パワーポイントで説明

(中山副会長)

内容が豊富で良いと思うが、題名のつけ方については、看板倒れにならないようお願いしたい。両館とも学校向けの教育普及事業があるが、それぞれの方針について、そのすみ分けはどのようなものか。

(塩田館長)

両館の連携をこの協議会や部会でお話いただいた。両館とも新潟市の美術館になったことで、なるべく方針を一致させていこうということだが、その一方で、地域の特殊性、新潟と新津の環境条件の違いということがあるので、その辺りも含めて、当然、微妙な差はむしろ出てきてしかるべきと思っている。

(横山館長)

やはり両美術館の特色づけがあり、出前美術館においては作家を変えて学校から選んでもらう形にしているが、どちらかというとな新潟市美術館は小学校高学年から中学校向け、**新津美術館**は低学年向けという形で差別化を図っている。オープンギャラリーも、新潟市は市域が広いので、区分けを考えながら対応している。

(宮田会長)

両館の違いがよくでてきているが、年間カレンダーの曜日の色は統一してほしい。資料について、今日もパワーポイントを見せてもらったが、紙の削減にもなり、委員の理解もずいぶん違ってくる。大いに進めてほしい。

(武田委員)

両館のスケジュールを見ると、新津美術館は「あいてマンデ〜」という、月曜日に開館する日がある。新潟市美術館は1日もないが、その辺はちょっとどうなのかという疑問がある。最初のほうでオープンギャラリーについてかなり議論されたが、月曜日をオープンギャラリーの日に設定して、貸し切りマンデーにするようなことも検討したらいいと思う。貸し切りにすれば一般の方は入らないから、学校の生徒ものびのびと講義を受けたり、時間に余裕を持って鑑賞できるのではないか。送迎バスも、休館日なので駐車スペースも余裕があるのではないか。

(中村委員)

改修後はワークショップなどができる部屋ができるとのこと。いろいろな新しい美術館にお邪魔すると、子どもたちと作家が作業しているのが私たち一般の客からも見えて、そういう風景がほほえましい。ぜひ、こちらの重厚な建物の中でそういった楽しい機会が生まれることを期待している。

(降旗委員)

両館の事業計画は、とてもメリハリがついて、人がたくさん入るであろう展覧会と、研究的な展覧会がきちんとなされているように感じた。特に、地域の美術の発掘というか、その調査がきちんとなされていることを評価したい。新潟市美術館の6月から7月の「金子孝信展」は資料がかなり見つかったということで、これも楽しみだ。

今、美術館ではアーカイブ資料の保存ということがブームだが、その辺でどういったことを考えているかを聞いてみたいと思った。

(福永委員)

私も会長のご意見のように、変わったな、良い形ですみ分けも意識されてきたなと思う。事業の充実も実感した。両館は、同じ市内の美術館だが、少し方向性を意識しながらここまで来たと思うし、この方向で充実させていくのが良いと思う。

普及事業についても、一朝一夕でできるわけではなく、地道な努力が必要で、形になるのは少し時間がかかると思うので、あまり焦らずやっていくのが良いと思う。

(宮田会長)

改修工事明けが大事だ。

東京都美術館の例で、あそこで成功したのはボランティアのもっていき方がうまかった。フェルメールの「真珠の耳飾りの少女」のブルーのターバンを約50人のボランティアがつけ、それで活躍する。館内のいろいろな案内をする。ターバンは目立つし、その辺の持っていき方が実にうまいと思った。都美館の扉を開けるということで「とびらプロジェクト」とした。都美館の扉を開けてみんなで楽しくやろうというアイデアだった。

ぜひ、開館に関してはじっくりと練って、ボランティアの人たちと町の人たち、教育関係の人たちとうまく一体となったようなとらえ方をすると良い。

休館しているときは、何か違う勉強をするのもいいかもしれない。

(菅井委員)

30年前に美術館を造る当時も大変だった。改修に入るということは、今、会長が言われたように周囲を巻き込んでいかないと、美術館関係だけで動いてやろうとしてもだめだと思う。頑張っていたきたい。協力できることはしたい。

(宮田会長)

過去からここまで来た、あるいはほかの館との違いというものを見ると、大変な進歩がある。いろいろな提案に対して、館の方が積極的にそれをプラスに向けて改革しているのがとても良いと感じた。

(大倉委員)

新津美術館の企画展、立地を生かしてたくさん来てもらうための企画を作り、入館者も増えている。一つの戦略として成功している。ただ、以前の新津美術館を知っている側としては、以前のような先鋭な企画展も期待したい。

また、以前から、亡くなった方だけではなく、今の作家たちも美術館で紹介してほしいということを言ってきた。機会に合わせて、新潟の若い、いい仕事をしている作家もいるので、

紹介してもらえるとうれしい。

(野川委員)

次年度の計画の説明で、今考えてみると、この紙面だけではイメージがわからなかった。今回、スクリーンを通して2～3点の作品の写真を見るだけでも全体像を遙かにイメージしやすいので、ぜひ継続してほしい。

教育現場の立場から、実は、私の江南小学校は昨年、一昨年と、出前授業に来てもらい子どもと一緒に勉強した。今年、オープンギャラリーでこちらにお邪魔した。今年も希望した学校がみんな行けたのかは分からないが、私が現在所属している新潟市の小学校教員の図工の仲間が100人位いる。小学校に専門はないが、熱心に図工教育を勉強している教員が3分の1位いる中で、機会があったら美術館で授業してみたいという方が何人かいる。

現状は、そんなにたくさんは希望しないのではないかと思う。しかし、キャリア教育と言ってプロのサッカーとか野球とかいろいろな方を呼ぶが、作家も同じような立場だと思う。江南小学校に作家に来てもらい作品も展示してもらって説明を聞いたら、子どもたちは子どもの絵しか見たことがないので、いろいろなことを質問していた。新しい初めての出会いで、参加した、あるいは来てもらった学校にとっては、非常に価値の高い教育だと思う。ぜひ、平成26年度も手を挙げた学校には行けるよう努力してもらいたい。

(宮田会長)

館からの発信といえば、例えば、全国のバスのフェスティバルがあり、子どもたち対象のポスターコンクールの審査をした。全国から出品されて来るが、残念ながら新潟県からは1校も来なかった。これは情報量の不足だろうと思うので、館のほうから学校や幼稚園などへ、ネットワークを作ることができると、特に新潟の場合はバスの影響力は相当強いと思うので、バス会社との関係を作るということもできるのではないか。いろいろなことを考えてみると良い。

5 閉会挨拶

(塩田館長あいさつ)

この2年間、両館に協議会で率直なご意見を頂戴した。それをかみしめながら美術館活動を続けてきたつもりで、その成果が徐々に現れてきているのかなと、宮田会長をはじめ委員のお言葉を聞きながら思った。今日も普及事業について大変有益なご意見をいただいたので、今後に生かしていきたい。部会にもご参加いただいている先生方、また第1期公募委員の先生方、ご苦勞に感謝している。

新潟市美術館は改修工事明けのお披露目に関しても、大変参考になるご意見を頂戴した。新潟市美術館、新津美術館、これからも頑張っていくので、引き続きよろしくご指導、ご鞭撻のほどお願いしたい。本日は、本当にありがとうございました。

(武田委員あいさつ)

2年間という長くて短い公募委員を務めさせていただき、大変お世話になり、ありがとうございました。

この委員を経験して、美術館に出かける機会が非常に増えた。子どもや孫たちにも出かけるように促している。それから、地域社会の方ということで、私が夜に仕事をしている学校に情報提供している。これからも館に足を運びたいと思うので、よろしく願いいたします。

(中村委員あいさつ)

大変お世話になり、ありがとうございました。

美術館の運営や、新しい方向に向かって皆さまが検討する場に同席させていただく機会が、私も勉強になった。自分も一員というつながりを感じ、自分事として考えられた。これをご縁に、何かご提案や情報提供などをさせていただければと思う。これからもよろしく願いいたします。

(宮田会長)

2020年に向けてこれはやりたいという話が出るかと思って期待していたが、新潟は関係ないということでは絶対はない。私どもの大学で、これは私が提案したのだが、上野の山の年間有料入場者数は今1,100万人しかいないが、2020年までに3,000万人にする計画を立てている。そのためには、例えば共通パスを持っている、Suicaを持っている、電車も、東京都美術館も、西洋美術館も、東京藝術大学大学美術館も全部スルーできて、食事も全部Suica1枚でスルーできるとか、多言語化した看板を作って統一するとか、いわゆる上野を芸術文化のコンシェルジュにするのだと。それが派生して行って地方にもいろいろ持って行けるようにすれば、3,000万人は全く不可能ではないということを、文部科学大臣に提言したら、大臣がとても喜んでくれて、よし、やろうということになった。楽しい空間、活気のある環境づくりをやりたいと思って話をしたら、大分具現化してきている。先ほども言ったが、新潟市美術館と新津美術館の両館で、また新しい新潟発信のようなことをやったら、日本海が表舞台だというキャッチフレーズか何かでやれたら、おもしろいと思う。